

## 復旦大学社会発展与公共政策学院との

### リレーションシップ強化に関する総合的研究

An interdisciplinary study on a reinforcement of the relationship  
between School of Social Development and Public Policy, Fudan University

松村 茂樹<sup>1</sup>, 大澤 清二<sup>2</sup>, 林原 泰子<sup>3</sup>, 鈴木 深雪<sup>4</sup>,  
長島 真由<sup>4</sup>, 鈴木 絵莉<sup>4</sup>, 角南 梨央<sup>4</sup>, 高尾 和泉<sup>4</sup>  
Shigeki Matsumura<sup>1</sup>, Seiji Osawa<sup>2</sup>, Yasuko Hayashibara<sup>3</sup>, Miyuki Suzuki<sup>4</sup>,  
Mayu Nagashima<sup>5</sup>, Eri Suzuki<sup>6</sup>, Rio Sunami<sup>7</sup>, and Izumi Takao<sup>8</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科, <sup>2</sup>大妻女子大学人間生活文化研究所,  
<sup>3</sup>大妻女子大学家政学部ライフデザイン学科,  
<sup>4</sup>大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科卒業生・復旦大学留学経験者

キーワード：復旦大学, リレーションシップ, 総合的研究  
Key words : Fudan University, Relationship, Interdisciplinary study

#### 1. 研究目的

(1) 中国上海にある復旦大学は、1905 年創立の中国を代表する名門大学の一つであり、その社会発展与公共政策学院は、同大学の社会科学分野を担う重要学院（学院は単科大学規模を有する学部の意）である。2005 年、本学文学部コミュニケーション文化学科 2 期生の鈴木深雪さんが、文科省推薦中国政府奨学金留学生（国費留学生）に採用され、この復旦大学社会発展与公共政策学院に 1 年間留学し、同学院中国社会学の第一人者である胡守鈞教授に指導を受けた。

その後、津久井（現姓長島）真由さん、鈴木絵莉さん、角南梨央さん、高尾和泉さんと、計 5 名のコミュニケーション文化学科学生及び大学院国際文化専修院生が同学院に留学し、角南さん、高尾さんは、胡教授の教え子で、現在同学院副院長を務められている徐珂副教授の指導も受けた。世界的レベルの大学で、有名教授の指導を受け得たこの 5 名は、中国社会学の研究能力のみならず、今の日本社会で最も必要とされる問題発見・問題解決能力を伸ばし、各方面で活躍している。

大学の国際化が求められる昨今、本学でも海外の大学との交流推進は必須の課題となっている。このような状況の中、世界有数の大学である復旦大学との交流をモデルケースとして、リレーションシップ強化の方法論を研究することにより、本

学のブランディングに寄与できれば、その意義は大きいと思う。

今回は、大妻学院創立 110 周年記念要望課題、すなわち本学の「未来」「現在」「過去」に関する研究も求められている。本研究は、この要望課題ではないが、本学の「未来」に貢献できる課題と考えている。

(2) 本研究は、本学復旦留学生在が培ってくれたルートを発展させ、世界が注目する中国社会の変化を中国社会学の第一人者である同学院の胡守鈞教授・徐珂副教授と共に研究考察しつつ、同学院とのリレーションシップ強化の方法論確立を目的とする。

すでに、平成 28 年度共同研究プロジェクト「アジア太平洋地域における諸問題解決に向けての総合研究」（課題番号:K2814 研究代表者:松村茂樹）の一環として、前出の角南さん、高尾さんそして松村が同学院を訪ね、胡教授・徐副教授と共に、「中国社会および中国社会学の現状」と題する座談会を行い、その論点の報告資料「中国社会および中国社会学の現状—復旦大学社会発展与公共政策学院訪問報告—」（『人間生活文化研究』No.27 2017）もまとめた。

この中で、中国社会が「集団」の時代から「個」の時代に移り変わっており、個人主義が台頭して

来ているが、自分勝手に生きるのではなく、秩序を有する個人が他者を尊重しつつ、常に社会貢献を心がける必要があり、このような「合理的個人主義」に基づいた生き方を「共生」、それができる人間のことを「公民」と呼ぶとする論点が提起された。そして、「公民」が作り出す社会において、腐敗はあり得ず、今後は、個人主義からさらに先進的な「合理的個人主義」社会へと移り変わっていくとの示唆があった。

これは、中国社会の変化を的確に捉え、それが望ましい方向性を有しているとの指摘であり、世界が注目する中国社会の問題発見、問題解決に資する提言となった。また、日本社会との比較も論じられ、その中から、新たな見解も出てきた。

このような座談会という直接コミュニケーションの場を設けることにより、大きな成果が得られる場合が多々ある。本研究では、今回は、胡教授・徐副教授を本学にお招きし、研究代表者と教え子である上記5名の本学復旦留学生を含む共同研究者がシンポジウムを開催し、中国社会、また中国社会との比較を通して、日本社会の未来を考えたい。そして、その成果をもとに、直接コミュニケーションによる共同研究を核とする海外名門大学とのリレーションシップ強化の方法論を打ち立てたい。

もとより、海外名門大学の研究者と直接コミュニケーションを取れるまでには、地道な交流の積み重ねが必要であり、一朝一夕にできるものではないことも確かである。本研究は、本学の学生・院生が培ったルートを発展させ、世界が注目する中国社会学の第一線の成果を共有しつつ、本学の国際交流に寄与できるリレーションシップ強化の方法論を確立しようとするものであり、他に類を見ない学術的独自性と創造性を有している。

## 2. 研究実施内容

今回は、「1. 研究目的」に記した復旦大学社会発展与公共政策学院の胡守鈞教授・徐珂副教授を大妻にお招きしてのシンポジウムは、諸事情によ

り開催できなかった。ただ、当方より、両教授の指導を受けた本学院生の高尾和泉さん、2019年9月より復旦大学に留学する本学4年生の吉越里桜さん（2019年4月より本学院生）と松村が復旦大学を訪問し、授業や研究会に参加することでリレーションシップ強化を進められたため、おおむね目的を達成したと言える。

今回、復旦大学を訪問し、徐珂副教授の授業「当代社会学理論」を参観して、中国における社会学の現状および方向性を理解することができた。その夜は、徐珂副教授と胡守鈞教授が懇親のための食事会をお開きくださり、復旦大学との関係を深めることができた。

また、胡守鈞教授が復旦校友倶楽部で主宰されている研究会にお招きくださり、復旦大学企業研究所所長の張暉明教授の講演を聴いた後、討論が行われ、中国経済の実情を理解でき、復旦大学の教授および卒業生の方々との交流を深めることができた。

## 3. まとめと今後の課題

復旦大学社会発展与公共政策学院の胡守鈞教授・徐珂副教授に指導を受けた大妻の学生・院生は、すでに5名となり、2019年9月より留学予定の吉越里桜さんで6名となる。両教授も大妻とのリレーションシップ強化に同意して下さっており、今回、その関係性を深めることができたことで、今後のより高レベルの交流発展を期すことができよう。

## 4. この助成による発表論文等

### ①雑誌論文

[1]松村茂樹「海外の大学とのリレーションシップ強化の実践」『人間生活文化研究』No.29 2019 投稿予定